

なんでやねん

発行責任者 吉岡 忠

No. 5

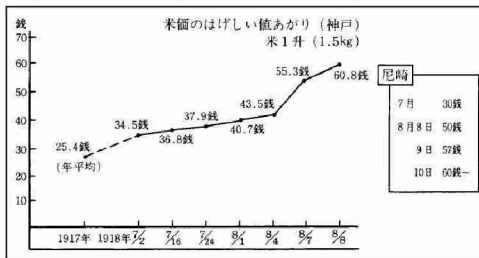
米騒動は尼崎でもおこった

1918年(大正7)7月、富山県魚津で始まった米騒動は、8月になると、京都、名古屋、大阪、神戸、東京など大都市に広がり、尼崎でも米騒動がおこった。全国で70万人以上の人びとが、米商をおそい、政府は警察だけでなく、軍隊まで出動させておさえた。その米騒動は、尼崎では、どのようにおこり、広がったのだろうか。

1 米価の急上昇と安い賃金

第一次世界大戦が始まると、わが国は好景気となり、商工業はめざましく発達した。

しかし、戦争が長びくと物価が上がり、労働者、市民の生活は苦しくなった。1918年、政府のシベリア出兵にそなえた米の確保と、大商人の米の買いしめで



米の値上がりはげしくなった。

尼崎でも、毎日のように米が高くなり、7月に1.5kgが30銭だった米が、8月8日に50銭となり、9日に57銭、10日に60銭をこえた(100銭=1円)。

米騒動が富山県で始まった日(8月7日)、尼崎市役所の工夫20人が「平均日給63銭で、米3升(4.5kg)が1円のころから少しも賃金が上がらず、これでは生活できない」と、賃金引き上げを要求し、その要求が聞き入れられなければ「全員退職する」と決議した。このような動きのなかで、市当局は市議会にもはかつて、一般職1人あたり月5円の臨時手当を特別に支給した。

2 米騒動おこる

米騒動は、8月11日には、大阪、神戸に広がり、群衆が米商をつぎつぎにおそい始めた。8月12日早朝、尼崎市内の大手橋のちかくに、1枚のはり紙が見つかった。それには、「もし米商が米を安売りしなければ、放火し、家人を傷つける」と書いて

あった。13日夜、ついに尼崎市内各地で群衆が米商をおそう事件がおきた。まず、午後7時ごろ、築地町に約100人の人びとが集まり、数軒の米商に「1升(1.5kg)30銭で安売りせよ」と要求した。それをきっかけに、午後8時ごろには、約1,000人にもふえた群衆は、宮町、中在家町などの米商をおそった。その群衆は、2つにわかれ、1つは西進して竹谷新田へ、もう1つは東へ進み、風呂辻町、辰巳町など10数件の米商をおそった。かれらは米商の屋根瓦、雨樋をひきおとしたり、表戸、戸しろうじを破壊したり、あるいは、「放火すべし」と叫ぶ声もあった。この騒動が完全におさまったのは、14日午前2時ごろだった。

小田村でも、13日夜、数百人の群衆が、常光寺、長洲の米商や農家などにおしかけ、「20銭の安売り」を要求したり、米を奪ったりした。

3 軍隊の出動と市の対策

米騒動が、市内でもおこることをおそれていた市当局は、事件の直前に、外米(ラングーン米)を緊急に買い入れ、市民に安売りの計画をしていたが、間に合わなかった。8月14日、米商がおそろわれ、米がなくなってしまうことをおそれた尼崎市は、強制的に市内の米商から、すべての米を買い集め、第一尋常小学校(城内小学校)に運び込んだ。これを市職員の手で守るとともに、市長は知事に軍隊の出動をたのんだ。ところが、夕方になっても軍隊が到着せず、ふたたび、数百人が米商だけでなく、酒屋にもおそいかかった。

14日の午後10時すぎ、高槻の工兵隊、つづいて篠山の歩兵連隊からも兵隊が到着し、合計259名の軍隊の力で騒動をしずめた。この騒動は、15日午前3時ごろやとおさまり、その後、軍隊は19日までに引き揚げた。13、14日の2日間におきた、この騒動は、当時の尼崎市と小田村を中心とした市域南部のほとんどの地域に広がった。市内でこの騒動に参加した者は、延べ3,000人をこえ、米商90戸あまりと酒商、呉服商などがおそわれた。そのうち、警察に逮捕された者は380人で、裁判にかけられた者は73人であった。県下では神戸につづいて多数であった。尼崎市内で逮捕された者の大部分は、安い賃金で働く工場労働者と日やとい労働者であった。裁判の結果、懲役刑(最高10年～最低1年半)67人、罰金刑(50円～30円)4人の処分が下された。この騒動から、約3か月後に、第一次世界大戦が終わった。

その後、戦争後の不景気ともからんで、労働者が組合をつくったり、賃金ひき下げ反対、解雇反対などで争議がふえるようになった。尼崎市は、この騒動がおさまった後も、約3か月間、市が米を買い集めて安売りをしたり、食料品、燃料などの安売りの店を指定するなど物価の安定に努力した。さらに、公設市場、市営住宅や市立診療所、職業紹介所などをつくり、市民生活の安定をはかった。

(尼崎中学校社会科研究会編『尼崎の歴史』p.90～92を要約した。ふりがなは倉橋がつけた。)